

# クロスカリキュラムによる領域「表現」の 総合的実践力習得のための試み

智原江美・下口美帆

## Cross Curriculum Design for Artistic Activities “Hyogen” in Preschool Education

Emi CHIHARA, Miho SHIMOGUCHI

### 1. はじめに ー総合的な実践力の必要性ー

保育現場の子どもの活動は複数の保育領域と関連した総合的な遊び=生活体験として行われる。そのため、幼稚園や保育園における保育教材も多領域と関連しており、保育者はそれに対応した総合的な教材を工夫する力が要求される。しかし、保育者養成校の「表現」の領域に関するカリキュラムは「音楽」・「図画工作」・「体育」・「言葉」に分かれて開講されており、その指導内容は教科目担当者が個々の専門領域の科目中で教材を取り上げて指導を行うのが現状である。このうち「音楽」・「図画工作」・「体育」の教科はこれまで実技科目の「保育基礎技能」としてとして取り扱われてきたが、平成23年度の保育士養成課程カリキュラム改正においては「言葉」も加えて「保育表現技術」という名称に改正され、これらの表現技術を実践的な保育活動として展開できる力をつけることが重要であるとされた。このカリキュラム改正の目的は「子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開」していくことの重要性を踏まえたものである。平成23年現代保育研究所研修会<sup>1)</sup>においても、また、平成25年度全国保育士養成セミナー（於：高松）での基調講演においても、保育表現技術の系列における教科目（表現）間の連携として、各科目（表現）をつなぐ横断的、総合的な学習の必要性が指摘された<sup>2)</sup>。

専門職としての幼稚園教諭や保育士として、それぞれの領域に関する専門的な知識・技能が必要であることはいうまでもないが、保育現場での実践においては専門的に学んだ各領域の知識・技能を自分の中で統合

し、一つの活動として構成することが必要となってくる。けれども、このような力をつけることのできる学びの機会には保育者養成課程の現状のカリキュラムでは設定されておらず、筆者らの実習指導（幼稚園・保育所実習の事前事後指導）の経験においても教科目の枠を超えて発展した活動を計画する実践力を習得できている学生は非常に少なかった。

保育職としての実践力をつけるためには教科目を連携させたクロスカリキュラムとしての実践が有効であると考えられるが、保育者養成系大学の授業においてクロスカリキュラムによる授業を実施している大学はほとんど存在しないと考えられる。本稿ではこれまで行った保育士養成課程の専門科目としての「図画工作」と「幼児体育」における科目間を連携させた活動の取り組みをクロスカリキュラムの視点から検討し、保育者養成における総合的実践力習得のためのクロスカリキュラムによる活動の有用性について受講生側と担当する教員側のそれぞれの視点から検討したい。

### 2. クロスカリキュラムとは

我が国では平成12年に小・中・高等学校において「総合的な学習時間」が創設され、そのための「横断的・総合的な学習」を行うことの必要性が提唱された。中・高等学校においては総合的な学習を実施する際に「教科・科目がセパレート化されすぎて統合を難しくしていた」ため、「教科等の性格を変えず一つのテーマに基づいて横断的に学習活動を展開し、そのテーマに対して各教科の見方・考え方を示すことが可能であり、

多角的な思考力を育成することが可能」なものとしてクロスカリキュラムが取り入れられてきた経緯がある。

また、固定化された教科枠の思考形態から脱却する意味や、たとえば環境・国際理解・情報などのボーダレス化した課題に対する思考力や判断力を獲得する新たな認識作用をもたらすことができることがクロスカリキュラムの学びであるとされている。<sup>3)</sup>

このような手法はまさに保育の実践においても非常に重要な事柄であり、養成校で学んだ各科目の専門的知識を統合させ、現場での実践的な活動に生かすことのできる力としての育成が必要とされるものである。

本稿では、保育現場での実践的能力を習得した保育者養成のために、多角的な思考力を育成し専門性を理解したうえで固定化された教科枠から脱却することを目的として、クロスカリキュラムの概念を用いた「図画工作」と「幼児体育」の教科間を連携させた活動について考察していくこととする。

### 3. 領域「表現」について

保育士養成課程における領域「表現」のねらいや内容については、文部科学省が示す「幼稚園教育要領」、ならびに厚生労働省が示す「保育所保育指針」において、表—1のように規定されている。

また、厚生労働省雇用均等・児童家庭管理局保育課が示す「指定保育士養成施設の指定および運営の記入について」「教育内容」においても表—2のように示されている。

◆表—1 幼稚園教育要領ならびに保育所保育指針における「表現」に関する記載<sup>4)</sup>

	幼稚園教育要領	保育所保育指針
	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
ねらい	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。 (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。	①いろいろな物の美しさなどに対する豊かな感性を持つ。 ②感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。 ③生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

内容	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。 (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。 (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。 (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。 (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。 (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。 (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。	①水、砂、土、紙、粘土など様々な素材に触れて楽しむ。 ②保育士等と一緒に歌ったり、手遊びをしたり、リズムに合わせて体を動かしたりして遊ぶ。 ③生活の中で様々な音、色、形、手触り、動き、味、香りなどに気付いたり、感じたりして楽しむ。 ④生活の中で様々な出来事に触れ、イメージを豊かにする。 ⑤様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。 ⑥感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。 ⑦いろいろな素材や用具に親しみ、工夫して遊ぶ。 ⑧音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。 ⑨かいたり、つくったりすることを楽しみ、それを遊びに使ったり、飾ったりする。 ⑩自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。
----	---	---

◆表2 「指定保育士養成施設の指定および運営の基準について 教育内容」より抜粋<sup>5)</sup>

<科目名> 保育の表現技術（演習・4単位）
<目標> 1. 保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得する。 2. 身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現等の表現活動に関する知識や技術を習得する。 3. 表現活動に係る教材等の活用及び作成と、保育の環境構成及び具体的展開のための技術を習得する。
<内容> 1. 身体表現に関する知識や技術 (1) 子どもの発達と運動機能や身体表現に関する知識と技術 (2) 見立てごっこや遊び、劇遊び、運動遊び等に見る子どもの経験と保育の環境 (3) 子どもの経験や様々な表現活動と身体表現を結びつける遊びの展開 2. 音楽表現に関する知識や技術 (1) 子どもの発達と音楽表現に関する知識と技術 (2) 身近な自然やものの音や音色、人の声や音楽等に親しむ経験と保育の環境

- (3) 子どもの経験や様々な表現活動と音楽表現を結びつける遊びの展開
- 3. 造形表現に関する知識や技術
  - (1) 子どもの発達と造形表現に関する知識と技術
  - (2) 身近な自然やものの色や形、感触やイメージ等に親しむ経験と保育の環境
  - (3) 子どもの経験や様々な表現活動と造形表現とを結びつける遊びの展開
- 4. 言語表現に関する知識や技術
  - (1) 子どもの発達と絵本、紙芝居、人形劇、ストーリーテリング等に関する知識と技術
  - (2) 子ども自らが児童文化財等に親しむ経験と保育の環境
  - (3) 子どもの経験や様々な表現活動と児童文化財等を結びつける遊びの展開
- 5. 教材等の活用及び作成と保育の展開
  - (1) 様々な遊具や用具、素材や教材等の特性の理解と活用及び作成
  - (2) 子どもの遊びをイメージを豊かにし、感性を養うための環境構成と保育の展開

表一2に示した指定保育士養成施設の「指定および運営の基準 教育内容」に示される「保育の表現技術」内容1、3においては、保育全体の内容理解と子どもの遊びを豊かにするための知識や技術の修得にとその教材活用、環境設定、具体的展開について言及されているが、こどもの遊びを豊かに展開するには、養成課程での様々な学びと実際の子どもの活動を結びつけ、状況に応じて各科目の学びを実践したり、学んだことをいくつか結びつけて応用するなど、有機的な学びの展開力、すなわち総合力が必要であると考えます。

一方、内容の2. においては、表現の領域とされている「身体表現」「音楽表現」「造形表現」「言語表現」等の表現活動に関する知識や技術を習得することの必要性が述べられており、専門性の重要性が示されている。

「こどもの遊びを豊かにする」ということを考えた場合、より遊びを広げるならば、科目の専門的な学びを有機的に結び付け応用する総合力が、遊びを深めるためには専門力が必要であり、保育者としては両方の力が必要であると筆者らは考える。

#### 4. 専門的な教科としての学び

##### 4-1. 保育者になるために身に付けさせたいこと

＜ディプロマポリシー＞

こども保育学科では、よき保育者を養成するための教育方針として下記の①～⑥のディプロマポリシーを設定している。

◆表3 こども保育学科ディプロマポリシー

ディプロマポリシー	①保育者として必要な専門知識・技能の習得に努める ②幅広い教養を身につける ③保育の対象となる人の状態、家族、地域の人の状況などを正しく判断し、その都度適切な援助行動や支援を行う事ができる ④保育者としての資質向上へ意欲を持ち、保育ニーズの変化に対応できる ⑤利用者に対してだけではなく、地域の子育て支援者としての責任を持った行動を取ることができる ⑥チームワークを大切にし、周囲と良好なコミュニケーションをとることができる
-----------	---

本学のディプロマポリシーにおいて①に示される保育者としての専門性と同時に②、③、④の力を習得するためには、各科目で学んだことを学習を統合させて応用する力が必要であると考えます。

＜カリキュラムマップ＞

また、上記のディプロマポリシーに基づき、各科目の主題と達成目標を定め、ディプロマポリシーと科目内容の関連性を明らかにした、カリキュラムマップを作成している。

(\*表中の番号①～⑥はディプロマポリシーの番号と対応し、それぞれ◎：ディプロマポリシー達成のために特に重要な項目、○ディプロマポリシー達成のために重要な項目、△ディプロマポリシー達成のために望ましい項目、と対応している。)

◆表4 「図画工作」「幼児体育」カリキュラムマップ

科目名	科目の主題	科目の到達目標	①	②	③	④	⑤	⑥
図画工作I	造形活動を実施するために必要な知識・技術について学ぶ	1. 描き、作るための基本的な材料・用具・技法の特性を理解し、適切に使用できる	◎		○	△	○	
		2. 保育の中で取扱う造形教材とその指導法について理解する	◎	△	○		○	○
図画工作II	造形活動について理解を深め、応用力や指導法を身につける	1. 造形表現活動における素材や技法を活動のねらいに応じて展開・活用できる	◎	○	○	○	○	

		2. 造形活動を行うための指導法、環境設定、援助について理解し、実践できる	◎	△	○	○	○	○
幼児体育 I	乳幼児期の運動学習の課題を理解し、運動遊びの教材・方法について学ぶ	1. 発達課題を踏まえた運動遊びの具体的な教材について理解・実践できる	◎		○	○	○	○
		2. 各種の運動遊びの指導法を理解する	○		◎	○		○
幼児体育 II	乳幼児期の運動遊びの指導法を習得し、教材を工夫する力を養う	1. 発達に応じた運動遊びを工夫できる	○		◎	○	○	
		2. 各種の運動遊びの指導法を理解し、実践できる	○		○	○		○
		3. 運動場面での事故防止に配慮できる	○		◎	○	○	○

各科目の達成目標とディプロマポリシーとの対応状況を見た場合、図画工作においては造形面での専門性の修得を重視し、その専門性を基にして活動を展開していく力の修得を目標としており、幼児体育においては専門性と総合力の両方を身につける事を目標としている事が読み取れる。両科目ともに専門性とそれらを横断的に応用する総合力の両方を重視していることが示されている。

#### 4-2. 「図画工作 I・II」

幼児期の造形活動は、素材を介して行動が導かれる。水や砂などを含めたさまざまな素材と関わり合い、触れる、並べる、描く、作るなどの様々な方法で対象となるもの（世界）を味わい、そのような体験が基盤となって、イメージを表出することや他者と関わり合う事へと発展する。このような活動を行うためには多くの素材や技法、道具と触れあう経験が重要となる。

保育者として、子どもの遊びや活動の中で、自然に学びを展開する力を身につけるためには、素材理解や道具の取扱い、子どもの発達に伴う造形表現に関する知識といった専門性を身につけた上でないと適切に援助、あるいは設定することは難しいであろう。

図画工作 I・II では以上の視点に立ち、「子どもの発達と造形表現の関わりを理解する」

「保育者として必要な知識・技術を身につける」「学生自身の感性を豊かにする」「以上3つの力を活かして、保育を展開する力を身につける」事を目標とし、下記に示す授業を行っている。

◆表5 「図画工作 I」 シラバス

科目	図画工作 I
授業テーマ	造形表現活動を実施するために必要な知識・技術について学ぶ
到達目標	1. 描き作るための基本的な材料・用具・技法の特性を理解し、適切に使用できる 2. 保育の中で取り扱う造形教材とその指導法について理解する
授業計画	1. 平面表現－子どもの発達と描画 2. 平面表現－観察画 I－見ることと描く事の間わり 3. 平面表現－形を組み合わせる表現する 4. 造形と表現：パネルシアターを事例に I：パネルシアターについて知る 5. 造形と表現：パネルシアターを事例に II：制作 6. 造形と表現：パネルシアターを事例に III：制作 7. 造形と表現：パネルシアターを事例に IV：発表 効果的な演じ方について 8. 教材研究 I－身の回りの物を素材に用いて制作する 9. 教材研究 II－身の回りの物を素材に用いて制作する 10. 教材研究 II－身の回りの物を素材に用いて制作する 11. 立体表現－紙立体制作 12. 立体表現－紙立体制作 13. 子どもの造形活動、作品の実際、展示について知る 14. 指導法について：造形表現におけるテーマ設定、発達との関わり、導入方法など 15. まとめ
授業方法	講義ならびに実技（作品制作）を実施する 学外見学を行なう場合がある
評価方法	作品ならびにレポート提出、出席状況、受講態度を総合的に評価する

◆表6 「図画工作 II」 シラバス

科目	図画工作 II
授業テーマ	造形表現について理解を深め、応用力や指導法を身につける
到達目標	1. 造形表現活動における素材や技法を活動のねらいに応じて活用できる 2. 造形活動を行なうための指導法、環境設定、援助について理解し、実践できる

授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 造形あそびとその援助</li> <li>2. 小麦粉粘土実習1－年齢ごとの環境設定と指導法</li> <li>3. 小麦粉粘土実習2－作品制作</li> <li>4. 素材研究－紙を用いた制作</li> <li>5. 素材研究－紙を用いた制作</li> <li>6. 版表現－ハンコ遊び1</li> <li>7. 版表現－ハンコ遊び2</li> <li>8. 生活の中からテーマを設定する－織りをテーマに：環境設定と指導法</li> <li>9. 生活の中からテーマを設定する－織りをテーマに：作品制作</li> <li>10. 生活の中からテーマを設定する－織りをテーマに：発表・鑑賞</li> <li>11. 織りをテーマに：伝統文化としての織り</li> <li>12. 様々な表現技法－ぬたくり、モノプリント</li> <li>13. 様々な素材を用いて－コラージュ表現</li> <li>14. 造形表現指導法</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
授業方法	講義ならびに実技（作品制作）を実施する。施設見学・体験実習などを実施する予定である。
評価方法	作品ならびにレポート提出、出席状況、受講態度を総合的に評価する

### 4－3. 幼児体育の学び

幼児期の身体活動は、領域「健康」のねらいにあるように、体を動かすことを十分に楽しむことであると体育担当の筆者は考えている。体力をつけることのみが目的ではなく、また、運動技能を習得することだけが目的とされているのでもない。遊びの中で自然に多様な身体の動かし方を身につけ繰り返し行うことで、身体技能として習得していくのである。体を動かすことが楽しい、快いと感じられることが生涯にわたっての運動習慣を身につけ、健康な体をつくることにつながっていくことになり、幼児期のこれらの体験は不可欠であると考えられる。

幼児期に必ず運動遊びとして経験させておきたいことは、逆さまになったり回転したり（逆さ感覚・回転感覚）、様々な体位感覚や体をリズムに合わせて動かしたり身体で表現するような経験であり、神経系機能の発達するこの時期にこそ習得しやすい身体技能である。<sup>6)</sup>

このようなことを子どもたちに体験させることができる保育者となることを目的に筆者が担当している「幼児体育Ⅰ・Ⅱ」ではカリキュラムマップにあげている次のようなねらいを設定し、それぞれ全15回の計画で授業を行っている。

◆表7 「幼児体育Ⅰ」シラバス

科目	幼児体育Ⅰ
授業テーマ	乳幼児期の運動課題を理解し、運動遊びの教材・方法について学ぶ
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発達課題を踏まえた運動遊びの具体的な教材について理解し、実践できる</li> <li>2. 各種の運動あそびの指導法を理解する</li> </ol>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 乳幼児期の発達と運動遊びについて</li> <li>2. 基本的な運動（歩く・走る・リズム走）</li> <li>3. ルールのある遊び1（3・4歳児向けのゲーム）</li> <li>4. ルールのある遊び2（4・5歳児向けのゲーム）</li> <li>5. ルールのある遊び3（鬼遊び）</li> <li>6. 平衡感覚を養う遊び（平均台など）</li> <li>7. 逆さ感覚・回転感覚を養う遊び1（マット・鉄棒など）</li> <li>8. 逆さ感覚・回転感覚を養う遊び2（マット・鉄棒など）</li> <li>9. 跳躍力を養う遊び（跳び箱など）</li> <li>10. リレー形式の遊び</li> <li>11. ボールを使った遊び1（投げる・受ける・ドッジボール）</li> <li>12. ボールを使った遊び2（転がす・つく・蹴る・サッカー）</li> <li>13. 用具を用いた遊び1（パラバルーン・フープなど）</li> <li>14. 用具を用いた遊び2（長縄・短縄）</li> <li>15. まとめ</li> </ol>
授業方法	実技を中心とした授業を行う。運動遊びについての知識的な理解を確認するため、必要に応じてレポート課題も課す。
評価方法	授業への出席・参加状況を重要な評価の要素とし、実技課題・レポート課題も含め、総合的に評価する。

◆表8 「幼児体育Ⅱ」シラバス

科目	幼児体育Ⅱ
授業テーマ	乳幼児期の運動遊びの指導法を習得し、教材を工夫する力を養う
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 発達に応じた運動遊びを工夫できる</li> <li>2. 各種の運動あそびの指導法を理解し、実践できる</li> <li>3. 運動場面での安全面の配慮ができる</li> </ol>
授業計画	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 運動遊びの意義とその展開</li> <li>2. 用具を操作する運動の工夫（なわ・ボール・フープなど）1</li> <li>3. 用具を操作する運動の工夫（なわ・ボール・フープなど）2</li> <li>4. 用具を操作する運動の工夫（なわ・ボール・フープなど）3</li> <li>5. 身体表現遊びの作品の構成1</li> <li>6. 身体表現遊びの作品の構成2</li> <li>7. 伝承遊び（コマ・竹馬）1</li> <li>8. 伝承遊び（コマ・竹馬）2</li> <li>9. 体育的な行事の企画</li> <li>10. 体育的な行事の実践</li> <li>11. ウィンタースポーツの体験と指導法の習得（スケート）</li> <li>12. 運動遊び教材の工夫と展開1</li> </ol>

	13. 運動遊び教材の工夫と展開2 14. 運動遊び教材の工夫と展開3 15. まとめ
授業方法	実技を中心とした授業を行う。必要に応じてレポート課題も課す。
評価方法	授業への出席・参加状況を重要な評価の要素とし、実技課題・レポート課題・教材研究発表への取り組みも含め、総合的に評価する。

## 5. クロスカリキュラムの実践

それぞれの科目の学びを統合させる試みとして、それぞれの科目の専門性を保ちながら2つのタイプのクロスカリキュラムの実践を行った。(その詳細は本学紀要第46集、48集、50集に掲載) これらの取り組みは「図画工作」と「幼児体育」の15回すべての授業を合同で行うのではなく、各科目の専門性と学びの統合を両立させるために筆者らはクロスカリキュラムによる実践が最適であると考え、以下の取り組みを行った。

### 5-1. 目的志向型の連携授業の取り組み(平成19年度実施)

この取り組みは「図画工作I」ではシラバスの第11、12回「立体表現-紙立体制作」の部分、「幼児体育I」では第11、12回の部分の連携授業である。

#### 5-1-1. 取り組みの概要

「まと制作」と「まと当て」は、平成19年度後期に、大型ダンボール工作としての「まと制作」を「図画工作I」で、出来上がった作品を用いた投球動作習得のための「まと当て」を「幼児体育I」においてとりあげたクロスカリキュラムとしての連携授業である。

両科目とも保育士資格のための必修科目となっており、1年生を対象として後期に開講されている科目である。授業の流れと取り組んだ時間を図1に示す。この取り組みは「まと制作」を保育者の教材研究、「まと当て」を遊びの実施部分およびまと教材としての検証とし、活動に連続性を持たせた『目的志向型』の連携授業であったと言える。

まず、「投げる・当てる」という動作をイメージしやすく「幼児体育I」において投球動作を取り上げてボールを「投げる・受ける」活動を行った。その後「図画工作I」において投球動作を習得するため

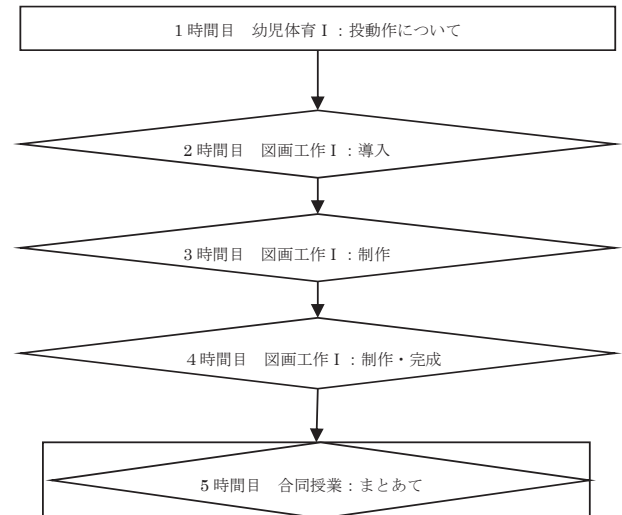


図1「まと制作」と「まと当て」の連携授業の流れ

にはどのような「まと」を制作すれば幼児が興味を持って投げることができ、また、活動に耐えるものができるかという説明と討議を行ったうえで全4時間をかけてグループでの制作に取り組んだ。まと完成後、体育館での合同授業を実施し、受講者全員が各グループの制作したまとで投球動作を体験した。「まと当て」終了後には両担当教員で授業の目的や作品としての「まと」について、「まと当て」を行ってどのように感じたか、また一連の連携授業についてどのように感じたかなどについてのレポート課題を課した。

#### 5-1-2. 「図画工作」としての活動と学び

「まと制作」の授業において、造形的専門性としては「ダンボールの特性を知り、立体工作の手法を身につける」「保育の教材としてふさわしい色や形、イメージを考える力を伸ばす」力を身につけることを目標とした。さらに、「幼児体育」との連携授業であることを踏まえ、作品が「ねらいとする動き」と「まととしての機能」の関連や、「保育にふさわしいイメージや形」について考えることを目標とした。

実際に学生が制作したまとは、

- ・ダンボールの特性を生かした仕掛けのあるもの
- ・子どもにアプローチするイメージを重視したもの
- ・「投球動作」に重点を置いたもの

といったものであった。作品例は図2・図3に示す。



図2 ダンボールの特性を活かした形態としかけのあるま

については、実際に作業を行うことで素材の性質とそれに適した加工について体験的に学んだ様子（図4）がうかがえた。「保育教材としてふさわしい色や形、イメージを考える力」に関しては大きさやしかけについて考え、工夫した様子がみられた。共同作業としての役割分担の重要性や計画性の重要さをあげた学生も多数いた。自由記述欄では「本当にやりやすくてパッと目をひいたまとはシンプルなもの、大きな絵が描かれていて仕掛けも単純な方が意外と楽しめた」ことに気付いた感想もみられ、ねらいとする活動を効果的に実施するには要素を整理することの大切さを体験的に学んだのではないかと考えられる。

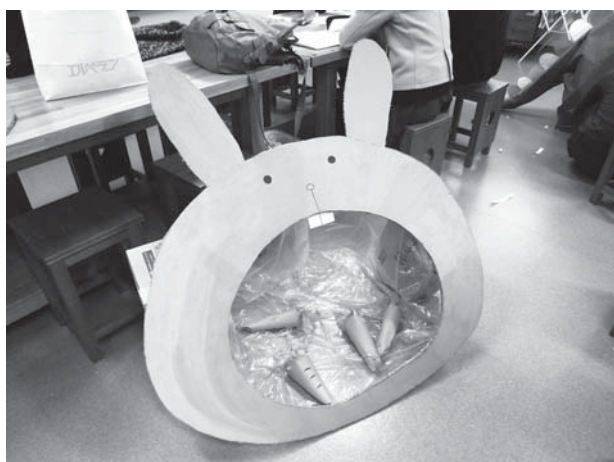


図3 イメージに配慮しながら年少児の投球動作に配慮したま

### 5-1-3. 「幼児体育」としての活動と学び

まと完成後、体育館で作成した「まと」を用いて「まど当て」を行った。一連の取り組みにおける「幼児体育」としてのねらいは、「小型ボール上手投げ」動作習得にあたっての保育者となる学生自身の「投球動作の確認」と、作品としての「まど」の「投球動作を習得できる教材であるかを検証する」ことであった。

作成した全作品について受講生全員で「まど当て」を行い（図5）、各作品について評価した。この「図画工作」と「幼児体育」の科目を連携させた取り組みを通して「学んでほしいこと」「考えてほしいこと」について予め両教員で質問項目した。具体的な項目として、

- ・作成したまどでまど当てを行ってみてどうであったか
- ・保育教材として効果的であると考えられるか
- ・改良すべき点
- ・投球動作習得のための教材としてのまどをどう考えるか
- ・より遠くへ、より強く投げるとしたら、どのような課題を子どもたちに与えるとよいか

などについて尋ねた。「作成したまどでまど当てを行ってみてどうであったか」や「保育教材として効果的であったか」については、実際に投げてみると「まどが小さすぎた」、「まどの強度に問題があった」、「ねらう位置が低すぎた」など、学生からは機能的な事柄に関する反省点が多数上がった。イメージと実際が大きく異なるということも、この一連の取り組みから経験できることである。「投球動作習得の教材としてのまど」



図4 加工法について試行錯誤する様子

連携授業終了後に課したレポート課題から学生の学びをあげると、「ダンボールの特性と立体工作の手法」

に関しては、「ままと当ては楽しいし投球動作習得にも効果的」や「繰り返し行うことに向いている」などの回答がみられた。投球動作をより発展させるためには、「投げる際に立つ位置を遠ざける」や「ままとを小さくする」「達成に応じてシールを貼る工夫をする」「得点をつけてゲーム性を持たせる」などの子どもたちが興



図5 幼児体育でのままと当ての様子

味を持って取り組めるようなアイデアがあがった。

#### 5-1-4. クロスカリキュラムとしての学び

「ままと制作」と「ままと当て」の『目的志向型』の連携授業を経験した学生は、幼児体育の授業で示された、「幼児の身体の発達に伴う投動作の変化」「幼児の身長」などを参考にして、実際の高さを測りながら、ままとの高さや形態を決めて制作を行っていた。この体験は一つの教材を考案する際に、一つの科目で学んだことだけでなく、「幼児体育」という実際の制作時間とは異なる授業での学びを思い出し、活用しながら考える体験になっていた。

また、「作成したものを使う」活動を通して、体験に基づく分析や考察の深まりが見られ、それぞれの教科目での効果が高まったと考えられる。また、学生の感想として、「ままとを作るだけの活動と、作ったままとに投げる活動を経験するのでは全然違うと思った。保育にも活かしたい」、「子どもの気持ちになって考える良い機会になった。子どもたちにも実際に投げてもらって反応を見たい」、「どうしたら子どもが楽しめるかをいろいろ考えていると工夫したいことが出てきてわくわくした。実際やってみるとうまくいった

こと、うまくいかなかったことがあり、勉強になった。共同でみんなで作る作業は新鮮で、考えを出し合う良い機会になった」と非常に肯定的に捉えている感想が多くみられた。また、「子どもの興味を引く内容にすることは難しい課題だと思った」、「図工と体育が一連となり作って遊べる授業は新鮮に感じた。作る過程においてグループ内で意見を出し合ったり他のグループと物を貸し借りしたりと協力することができた。子ども達にも友達と協力し合って作るという体験はいいと感じた。実際に投げてみるとうまくいかないところもあったが、それをよい発見と考えて次に制作するときの参考になるように考え方を変えればよいと思った。他のグループの作品を見ても、思いつかないアイデアがあり、とても参考になった。」などの教科目を連携させた取り組みでしか学べないような体験を感想としてあげる学生が多く見られた。

#### 5-2. テーマ展開型の連携授業の取り組み（平成21年度実施）

この取り組みは図画工作Ⅱでは第8、9、10回目「生活の中からテーマを設定する－織りをテーマに」第11回「織りをテーマに：伝統文化としての織り」の部分、「幼児体育Ⅱ」では「織り」というテーマでの身体活動は取り上げてはいないが、体の様々な動かし方を体験する教材を工夫する力をつけることをねらいとした第12回から14回の部分の連携授業である。

##### 5-2-1. 取り組みの概要

この活動は「織り」をテーマとして一つの共通するテーマを「図画工作」、「幼児体育」それぞれの科目特性を生かした活動に展開した『テーマ展開型』の連携授業である。造形活動と身体活動のつながりを気付かせる新たな足がかりになりうると考えられる。

「織り」は平成21年度前期の「図画工作Ⅱ」と同年度後期の「幼児体育Ⅱ」の学期をまたいで取り組みである。この2科目は2年生を対象に開講されている選択科目である。「図画工作Ⅱ」では、平成21年に全3時間を充てて「手作りの織り」とさらに半日を充てて「西陣織会館見学と機織り体験」を実施した。「幼児体育Ⅱ」においては、平成22年1月に全3時間を充てて「体を使った（身体活動としての）織り」を実施し、終了後まとめとして受講者にレポート課題を課



した。両科目は選択科目であったことと学期をまたいで開講されていたため、全員が両科目の受講者とは限らず、「身体活動としての織り」に取り組んだ学生全員が前期に「図画工作Ⅱ」を履修していたならば取り組み方もっと積極的なイメージを持ってできた可能性も考えられる。

「織り」をテーマとした連携授業のねらいとして

- ①総合的な活動を体験し、科目間連関について理解する
- ②身体活動の軌跡が造形作品となる面白さを味わう
- ③一つのテーマから様々な活動に展開できることを体験する

の3点を両教員で設定した。ねらい③については、図6に示すようなイメージとして一連の活動をとらえた。

### 5-2-2. 「図画工作」としての活動と学び

手指を動かすことは、ものに触れる、質感を感じる

など外界に接し感じることで、ものをつまむ、動かすなどといった「外界への働きかけ」に大きな役割を担っている。さらに近年の子どもたちは手指を動かす機会が減少し指先の巧緻性が低下している。このような現状を踏まえ、「手作りの織り」を教材として設定した。「手作りの織り」のねらいとして

- ①生活の中から様々な色・形・手触りなどに気づいたり楽しんだりする
- ②身の回りの物（本課題では布）の成り立ちを知る
- ③手指を動かすものつくりを体験する
- ④様々な素材を織り込むことによってそれぞれの素材の性質や組み合わせの面白さを味わう
- ⑤子どもたちが実践する場合にふさわしい教材の工夫について学ぶ

の5点を設定して「紙の織り」（図7）と「丸織り」（図8、10）「平織り」（図9）に取り組み、終了後にレポート課題を課した。

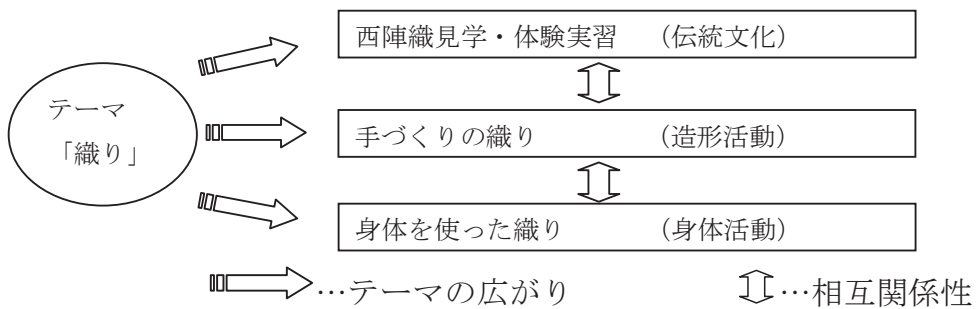


図6 テーマ展開型の授業イメージ

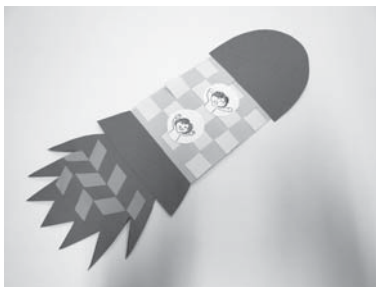


図7 紙の織りの作例



図8 布を用いた裂き織りの作例



図9 平織りの作例

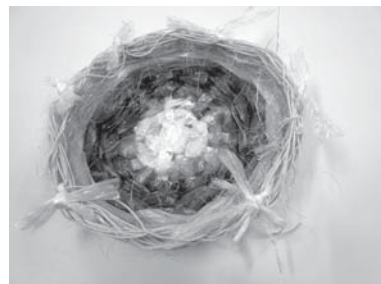


図10 異素材を組み合わせた丸織りの作例

手指による「織り」の作品制作を通して学んだことについてのレポート課題では、「織りの仕組みに関わるもの」「繰り返しの作業」「生活や身の回りの物との関わり」をあげた学生が多かった。「織りの仕組み」については、「布がどうやってできているのかが理解できた」「縦糸と横糸で布ができていることが分かった」など、生活に密着した知識として理解したことを多く上げていた。「繰り返しの作業」に関しては「交互に糸を通すという単純な動作の繰り返しによって一つの織物ができていることを学んだ」や「単純作業の繰り返しが実はすごく楽しかったです」と、繰り返すことによって線が蓄積して面を作っていく過程の楽しさや達成感をあげている者も見られ、この感想は子どもたちが体験した際に共感できる素地となると考えられる。また、「生活とのかかわり」に関しては、「毎日身に付けているものなのに意識したことがなかった」「服もこうやってできていると思うと粗末にできない」「昔はすごく手間をかけて布を作っていたんだと思った」などの感想がみられ、これらの視点は保育の現場での子どもたちの生活体験への気づきへも繋がるものである。

「手作りの織り」を体験したのち、大学が京都に立地していることを活かし、西陣織会館の展示及び着物ショー見学、機織り体験を含めた学外授業を実施した。体験後の学生の感想として「伝統工芸に触れるのは良いと思った」や「機織り体験ができて感動した」、「日本の文化を感じた」などがあがった。

これらの「図画工作」としての一連の取り組みによって、学生は「織り」や「布」について、織りの仕組み、子どもの造形活動への展開、表現としての魅力、文化的豊かさなど、多面的にとらえることができたと考え

られる。

### 5-2-3. 「幼児体育」としての活動と学び

先に挙げた投球能力をはじめ子どもたちの体力・運動能力の低下が叫ばれており、現場の保育者から子どもたちが自分自身の体を制御したり瞬間的な身体の使い方を判断する能力、二種類以上の動作を組み合わせる能力などの著しい低下が問題になっている。

このような身体を巧みに制御・操作する動きは幼少時の固定道具や器械体操系の遊びを経験することで向上するといわれているが、「つらい・しんどい」思いを伴う姿勢制御の動作などの体験は現代の子ども達は極力避ける傾向にある。「身体活動としての織り」の取り組みとして全身を使った「平織り」「丸織り」を体験することが「かわす」や「素早くまたぐ・くぐる」といった子どもたちの体の操作性を高める動きの習得のための教材になると考え、連携授業として実施することとした。

「幼児体育」としては、「かわす・またぐ・くぐる」といった自分の体を素早く操作することを体験することに加え、本来、身体活動はその軌跡が可視的な形として残ることはないのであるが、この「身体活動としての織り」は「身体活動の軌跡が造形作品となる」ことで「作品としての面白さを味わう」ことができるため、この二点をねらいとしてあげ、「平織り」(図11)と「丸織り」(図12)に取り組んだ。「平織り」での体を左右に「かわす」動きや「丸織り」での「またぐ・くぐる」といった動きはそれらを素早く行うことで体のしなやかさや敏捷性を養うことができる。また、「くぐる」動作は姿勢を低くしなければならず、少なからず苦しさを伴う動作である。通常子どもたちが決して



図11 身体活動としての織り（平織り）



図12 身体活動としての織り（丸織り）

積極的には行わない動きであるが、「織り」の作品を作成するといった目的を持つことにより、楽しく取り組むことができるのではないかと考えた。

身体活動としての作品を織り上げた後の学生の感想として「動きの体験」より「作品を作り上げることの楽しさ」をあげている者が多かった。「作品が出来上がるということで、ちょっとしんどい動きもわくわくして行えるし達成感が生まれる」や「全身を使っただけの繰り返しの動きはやっていてとても楽しかった」「目に見えて作品が出来上がっていくことがわかるので達成感が得られる」といったものがあがった。

#### 5-2-4. クロスカリキュラムとしての学び

『テーマ展開型』としての教科目を連携させた一連の取り組みについての学生からの感想は、先に上げた連携授業のねらい①の学びとして「日常の動きやしていることも見方を変えれば体育や図工、その他の領域に関わってくると思った」、「織りと体育に関係があるとは思わなかった」と初めての体験に驚きや新鮮さを感じながらも「何かを作って運動につなげる、体を動かして作品が出来上がるというのは保育の中で重要なことだと思った」という意見に代表されるように、カリキュラム上個別に行われている教科目の間に関連性があることを理解することができていた。自分たちが体験したことをもとに生活体験と結びつけるなど、保育の教材を総合的に扱うきっかけができたと考えられる。

連携授業のねらい③としてあげた「一つのテーマから様々な活動に発展できることを体験する」ことに関しては、今回は「織り」を主たるテーマとして取り上げ、多方向に展開した。今回の活動に関して感じたこととして、「テーマが一つでも様々な展開を生み出せるのは保育士に必要なことだと思う」「いろいろな視点から考えることで楽しみ方は何倍にもなる。そういったたくさんの視点、ひらめきを持てることは保育者にとって大切だと思った」など、活動が広がっていくことの面白さに気付いた学生も見られた。

### 6. クロスカリキュラムとしての連携授業の意義

#### 6-1. 教科の専門性および総合的実践力としての学び一連の「図画工作」と「幼児体育」の教科目を連携

させたクロスカリキュラムとしての取り組みを行うことの具体的なメリットとして、つぎのようなことがあげられる。

『目的志向型』としての「まと制作」と「まと当て」のクロスカリキュラムとしての取り組みは、単独科目としての活動に比べ、美術作品としての芸術性を重視するのではなく、子どもの体格・能力の発達段階を踏まえたより実用的な作品として作成することができることである。実際の保育において保育者の自作教材を使用する場合は、何よりも子どもの使用に耐えることが最も重要な要素である。今回の取り組みとしては、作成した「まと」に向かって繰り返しまと当てを行うことで初めて子どもの投球動作習得につながるものであり、作品としての「まと」は繰り返しの使用に耐える耐久性・安全性を備えていなければならない。「図画工作」の単独科目で行った場合に比べると、「幼児体育」と連携することで、学生は作品を制作する際に、子どもが興味を持てるデザインやしかけ、耐久性・安全面の配慮などについての観点の必要性について学ぶことができ、保育現場の教材としては重要なポイントについて体験できたと考えられる。

『テーマ発展型』のクロスカリキュラムとしての取り組みは、一つのテーマを様々な活動に発展させるということで学生にとって「保育における活動はすべてが連携している」ことへの理解につながったのではないかと考えられる。単独の教科としての実施ではこのようなことを経験するのは難しく、教科目を連携させることで保育における活動の発展の重要性を感じることができることもクロスカリキュラムのメリットである。

そして、子どもの活動は十分な環境設定がなされた場合にはダイナミックなものへと発展することが可能であり、子ども自身の学びも大きい。今回の「目的志向型」連携授業の取り組みである「投球動作」においても、「テーマ発展型」連携授業としての「かわす・またぐ・くぐる」活動においても、ともに環境が子どもの動作や活動を引き出す取り組みについての学生の学びになったと考えられる。「まと」に向かって投球動作を行うことで、子どもたちの投球動作はおのずから合理的なものとなる。また、「かわす・またぐ・くぐる」動作も楽しく取り組むことができ、大きな動作へと発展することが推測される。子どもにとっては「ま

と当て」や「身体を使った織り物作成」という活動自体を楽しむことが目的であるが、保育者のねらいとしては活動を楽しむことによって習得させたい動作や体験させたい活動があるのであり、保育者が子どもの発達に見合った環境設定を行い活動を提供することの重要性を学生が理解する手掛かりとなると考えられる。

## 6-2. 学生の取り組みとしての学び

また、今回取り組んだ活動の多くはグループメンバーの協力によって行うことのできた活動であった。学生からはメンバーの協力体制の大切さ、計画を立てることの重要性などが感想としてあがったが、これらも実際に仲間と共に活動することで学生が直接体験したことである。学生自ら感じたことや学んだこととして「人との協力」「コミュニケーションの大切さ」が上がった。「みんなと協力したことで一体感ができて一つのをみんなで作ることの楽しさを学んだ」といった感想として挙げられた。保育者の資質としてはチームワークや協力体制が取れることは非常に大切であり、これらの学びも実践力につながっていくと考えられる。

これからの保育者は保育の専門家としてより専門性を高めつつ、かつ実践力を身につけることが求められている。保育者養成機関で学んだ各教科の専門的知識・技能を有機的に連携させて教材としての内容を深めていくことのできることの実践的体験が必要となってくる。このように各科目での専門性と科目間の連関を両立させた上で保育の実践力を育成するためにはクロスカリキュラムが有効となろう。

## 6-3. 担当教員としての工夫と課題

クロスカリキュラムを通しての学生の経験は保育現場においての実践とも直結しており、今後「保育表現技術」系列の教科目において積極的に実践していくことが、学生の総合的な実践力を高めるために有効であると考えられる。しかし、クロスカリキュラムとしての取り組みを進めるには養成校におけるカリキュラムや時間割の組み方などの制約による問題が生じる可能性もある。筆者らが実施するにあたっては連携させる教科目は同学期に開講されている方が実施上の問題点がなく、学生にとっても連携授業を通しての学びが多いと思われる。

そのほか、現状ではどちらかの科目を担当する教員がもう一方の科目の授業に参加するなど、本来の担当以上の授業をこなすことになり、実際のコマ数以上の負担になることも否めない。また、カリキュラムや時間割上の制約がない場合でも、授業担当者がそれぞれの担当科目の特性やクロスカリキュラムで行う活動の重要性についての認識を持ち、各教員の専門性を超えた総合的で柔軟な考えを持って計画・実施することが必要となるであろう。

## 6. まとめ

「図画工作」と「幼児体育」の連携授業の取り組みを行った。投球動作習得を目的とした「まと制作」と「まと当て」といった『目的志向型』の連携授業と、「手作りの織り」、「伝統文化としての西陣織の体験」、「身体活動としての織り」といった、一つのテーマを様々な活動に発展させる『テーマ発展型』の連携授業を行った。これらのクロスカリキュラムとしての取り組みでは、単一教科目では体験できない学生の学びが見られ、保育現場での実践力育成に有用であると考えられる。

今回の連携授業で取り上げたテーマのほかにも、「図画工作」と「幼児体育」のクロスカリキュラムの授業に取り組むテーマとして「床面へのデザインステッカー制作とケンパ遊び」や「ダンボール制作とキャタピラー遊び、障害物遊び」などが考えられ、学生からもアイデアを募り、様々なテーマでの活動に発展させていきたい。

また、今回の連携授業の取り組みは「図画工作」と「幼児体育」の教科目であったが、今後は「保育表現技術」として「音楽」・「図画工作」・「体育」・「言葉」の領域の総合的な取り組みを実施して連携を深め、保育士を目指す学生の総合的な実践力育成に取り組むと考えている。保育表現技術としての「音楽」・「図画工作」・「体育」に「言葉」を加えた総合的な活動の代表的なものとしてミュージカルや劇遊びが考えられるが、それ以外の活動も教員間で検討しながら新たな取り組みを積極的に取り入れていきたい。

## 注および引用・参考文献

1) 平成23年8月9日, 現代保育研究所第2回セミナー

(テーマ：保育内容「表現」について，於：大阪)  
において、「音楽」「図画工作」「体育」「言葉」の  
横断的な連携の必要性が指摘された。

- 2) 平成 25 年 9 月 4 日～5 日，全国保育士養成協議  
会平成 25 年度保育士養成セミナー（於：高松）  
基調講演「新システムの下での保育者養成」（講  
演者：小川博久氏）  
において、保育士養成課程カリキュラムの「保育」  
関連科目の相互関連性の不在  
および学科内容理解と現場体験の乖離が指摘され  
た。
- 3) 高階玲治編，「実践 クロスカリキュラム」，図書  
文化，1996，p20
- 4) 子どもと保育総合研究所 森上史郎 監修「最新  
保育資料 2013，ミネルヴァ書房，p320, 321, 338,  
339
- 5) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局 指定保育士養  
成施設の指定及び運営の基準について 一部改正  
雇児発 0808 第 2 号 平成 25 年 8 月 8 日 別紙 3  
別添 - 1
- 6) 智原江美，「幼児期の発達からみた運動遊びの考  
え方」，京都光華女子大学短期大学部研究紀要第  
49 集 pp.7～18 に詳しい

